

## 境界と辺境—ある模型概念の構築へ向けて—

井坂, 義雄 / Isaka, Yoshio

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

96

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

2003-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002110>

## 境界と辺境

——ある模型概念の構築へ向けて——

井 坂 義 雄

(1)

多様性に彩られた世界の特定部分に関心を集めるという人間の能力と、具体的に解決を求められている事態に対応する人間の能力は、おそらく表裏一体をなして機能しているに違いないが、この二つの活動を可能にし、活動そのものに根拠を与えて、次の活動を生み出していくという一連の人間行動における概念の働きを論ずるには、これに相応する学問的訓練を受けなければならないことは自明である。しかし、このような訓練に不足し、しかも、人間の知的活動の根底にかかわる問題で、なにがしかを論じたいと考えることになれば、同じ問題に触れた先人の言葉を冒頭から援用することは許してもらえらるだろう。

S. T. コウルリッジは次のように言っている。

いつの時代にも、ちょうど本能によって強制されたように、自己の性質を一つの問題として提示した人や、この問題の解決に努力した人びとがいた。第一段階は分類表を作ることだった。彼らは意志があるか、ないか、の原理に基づいてこれを作成したらしい。いろいろなわれわれの感覚、知覚、運動は能動的なもの、受動的なもの、あるいはこれら両方の性質を帯びた中間的なものとして分類された。つづいて、もっと明瞭な、自発的なものと自然発生的なものの分類がなされた。われわれの知覚作用においては、われわれは外部の力に対して全く受動的であるように思われる。われわれは風景を映している鏡か、あるいは未知の手が風景を描く空白の画布か、そのいずれかである。<sup>1)</sup>

鏡としての我々に映っている風景、あるいは空白の画布に未知の手が描く風景は、まず見えなければならぬ。日常生活における我々は、「ものを見る」、「ものが見える」<sup>2)</sup> という作用を通じて世界と接触し、必要に応じて現実を分節し、関心を特定領域に向けるという行為を繰り返していると考えることができる。我々はこの「見る」「見える」という与えられた作用<sup>3)</sup> によって生きているために、つねに多忙であると言えることができるのかもしれないが、多忙であるということは必ずしも積極的であることを意味するわけではない。「見る」「見える」作用を通じて我々が途方もないほどと言っているかもしれない大量の、いわば「実物」を手に入れることができるのは経験と教育であることは確かだが、これら「実物」が本物であるか偽物であるかを判定する確かな基準があるわけではない。たとえ基準があるように思えても、粗雑なものにすぎないかもしれないのである。にもかかわらず、我々が、これらの「実物」を実体として、あるいは実体と等価なものとして信ずる傾向にあるということは、日常生活の中で、つねに経験できることである。根本的なものや雑多なものを含めて、我々は特に現代のような都市化した生活の中では、おびただしいほどの「実物」を生活の中で獲得しているが、たとえ、これらおびただしいほどの「実物」が知の領域の中で実体として存在するようになるとしても、量的な措置に困ることなく過ごすことができる。なぜなら我々は概して大まかな概念に取り囲まれており、通常は、いわば弛緩した空間的状况の中で生きていると考えられるからである。何かの理由でか、あるいは偶然に、現実が我々に決断を迫ってくるような事態が起こらないかぎり、生活の中で流通する概念自体は一般に大まかであると定義づけることさえできそうである。

このような定義づけに信憑性が得られるかどうかは疑問であるし、門外漢としての慎みを失っているわけではない。ここに展開しようとする試みは、自然科学も含む真理や真理体系があるとする考え方から見た場合の人間の知的活動の恣意性<sup>4)</sup> を前提としているということを断っておかなければならない。ここで論じようとすることは、あまりにも試論的であるので、概念一般、および概念作用そのものを論ずるわけではないということを断っておかなければならない。

## (2)

体験することはありえない死について多くの体験が語られているという事実を説明することは簡単である。直接の死の体験と思われるものは死についての体験か、死に至る体験として体験され、語られたものに違いない。「限定できないものの漠然とした印象というようなものは、合理主義の体系において占めるべき位置をもたない」<sup>6)</sup>のである。しかし現実には体験は語られ、蓄積され、記録されている。ここから「不合理な直接的な確信こそ私たちの内部深くにひそむものであり、合理的な論証はうわべだけの見せものにすぎない」<sup>6)</sup>と理解する必要が生じてくる。不合理な直接的な確信は合理的な解説にとどまっている生に影響し、よく知られているパウロの回心のように、とつぜん生を作り替えてしまう、と一般に理解される。

同胞としての人間に起こったと想定される宗教的体験や臨死体験を理解するために、理解しようとする者が合理主義を越えなければならないということは何を意味するか、ということが当面の問題である。これは明らかに一線を越えることを意味している。線の向こうに何があるにしても、このことは変わらない。

生の終焉と考えられている死に向かう過程、あるいは死そのもの、あるいは死後の世界を体験として直接記録することは不可能である。体験の記録はすべて回顧であり、後日談である。もしも我々が一線を越えることを拒み、一線の向こうに懐疑の目を向けつづけるとしたならば、体験され、記録されたものの大半は合理、不合理を問わず、死を概念する、とでも表現すべきものとして理解できるものである。これには、死を概念する主体がなければならない。主体が社会性を失うほど同胞から理解されなくなり、世間から孤立しているとしても、死を概念するという点では、主体は同胞から完全に追放されることはありえないだろう。

私たちは、病的な心のほうがいっそう広い領域の経験に及んでおり、その眼界のほうが広いと言わねばならぬように思われる。<sup>7)</sup>

たとえ、より広い眼界を有するとしても、主体が同胞の世界にとどまるかぎり、同胞が許すかぎりにおいて合理的世界の中にあると言わざるをえ

ない。一つは主体が主体自身を忘れないからであり、一つは、主体が一線を越えていないからである。主体は一線を越えることができなかった。その結果、生の世界に引き返し、越えることができなかった線を思いやる。そこにあるものは、目に鮮やかな「三途の川」であろうと「光の道」であろうと<sup>9)</sup>、ほんやりとした地平線を見ることになるだろうからである。「死は現存在の最も固有な可能性なのである」<sup>10)</sup>と言えるほど、世界は主体に引き寄せられる。死への関心は主体への関心でもある。

先駆的決意性は、死を「克服する」ために捏造された逃げ道ではなく、良心の呼び声にしたがう了解なのであって、この了解が、現存在の実存を支配するにいたって、あらゆる逃避的に一時しのぎの自己隠蔽を根本的に雲散霧消させる可能性を、死のために解放するのである。<sup>10)</sup>

この「了解」、または「現存在の実存」に、中心と地平線の関係をもつような場を想定することはできないだろうか。もしできるとするならば、死を概念することは、ほとんど生を概念することと同じ、あるいは生の全体を概念することと同じであることと考えることができる。じっさい、憂鬱で暗い生を明るい希望に満ちた生にする原動力を、見える生の辺境に注意を向けて理解することから得ている例は数限りなくある。合理主義には組み入れられないという負い目を負いながらも、より強く生を肯定する力として効力を発揮する例を我々は多く見ることができる。<sup>11)</sup>

### (3)

死を概念し、生を概念するという行為を個としての主体から解き放し、より広い関係図を描くための空間を得るために、ここに一つの材料を提示したい。私は偶然のことから、次の文を読むことになった。<sup>12)</sup>

斯して、シベリアで墓もないまま土となった方々は言うに及ばず、窮地に追い込まれて九死に一生を得て、帰郷し喜びの家族と日を送る内に、後遺症で亡くなった方々を思うと、私は幸せと言わねばならぬ。喜ばねばならぬ。有難いことです。

然し、その方々はどんなにか今日の社会的な扱いに、政治的な取り沙汰に不満を持っていた事か、死しても死に切れない感だったろう。語っても話しても取り上げてくれる人もなく、己が心に秘めて墓入りされたのだ。お気毒だ。申し訳ないのだ。この人達の心を蹂躪させてはならない我等に義務がある。<sup>13)</sup>

ここに記されているのは、ソ連に抑留された者の「血涙の記録」<sup>14)</sup>の「終わり」の部分である。強制労働に従事した事実が綴られている文章を読み、この引用文を読むと、我々は引用文の作者が伝達したいと思っている二つのことを読み取ることができる。一つは、「今日の社会的扱い、政治的な取り沙汰に不満を持って」いることであり、もう一つは、このことを知らない人々に伝えたいことである。この作者の文章はこの文章を越えて、つまり、この文章の読者より広い範囲に訴えるという形で実現するかもしれない。また、それが目的でもある。「語っても話しても取り上げてくれる人もなく」という現実を変えられるかもしれないのである。伝言は伝えられる可能性があるし、じじつ、半ば実現しているとさえ言うことができる。問題は、「取り上げて」ほしいことを誰に伝え、誰に実現してほしい、すなわち、理解してほしいと意図しているかである。この引用文の作者が目指すものは、読む人に、そして、それより多くの人に、作者と仲間たちが体験した過酷な経験を共有してほしいということであり、この過酷な経験を共有できる人間は限られているという現実がある。さらに重要なことは、この過酷な経験を現場で作りに出した人間と、それを可能にした環境を生み出した人間が、この引用文の作者の視野の向こうに置かれているように見えることである。経験の内容が正しく理解されていないもどかしさは、経験の内容が正しく理解されるはずだという前提があって起こってくるはずである。もどかしさは「義務」になり、訴える方向は鮮明になる。目的が実現するかどうかは別として、ある方向に向かう力が働いていることは確かである。この力は明らかに目標を捕らえており、そのかぎりにおいて生き続けるであろう。仮に妨害するような何か、あるいは何かの事情があるにしても方向性があるかぎり、死滅することはないだろう。この力自体が一つの事情を示すものだからであり、たとえ周辺化される、すなわち辺境に押しやられる傾向にあるとしても、類似する何かに取って代わることは

できない。ここにある方向性こそ、この伝言がもつ力であり活力の源であると考えることができる。

我々はシベリアの過酷な状況を想像することができる。その想像された状況の外側に線を引き、こちら側に引き寄せる。線の向こう側からの理解を期待はしない。線の向こう側に何があるかと関心はない。関心はもっぱら何かの中心に向けられており、それが示すであろう反応への期待である。叫ぶかぎりは、あきらめることはないし、伝言が存在するかぎり、叫ぶ方向は変わらない。

(4)

究極や極限状況に寄せる関心は、個人であろうと集団であろうと、興味をもつという形で、我々の日常生活の中に色濃く反映しているにもかかわらず、しばしば日常の関心の外にあるように思える理由を問うとすれば、関心の対象となるはずの形象は日常性の「暗黒部」、あるいは「心の闇」<sup>15)</sup>に生きているからだ、とすることができるかもしれない。見えないものへの関心は通常は眠っており、また眠っていることができる。我々は明るさの中に生きていなければならないし、日常を覆う明るさは、一瞬たりとも安心してはられないような状況とは違う状況を保障しているからである。妖怪<sup>16)</sup>は日常性を越えており、たとえ追体験等によって実体あるものとして感じられるとしても、それ自体としてあることは許されない。合理主義の枠の中で我々の生活を規制し、また保護している法秩序〔正義〕、習慣、気遣い〔思いやり、愛情〕、自然環境等の中に妖怪が入り込まないのは、我々の日常が明るくて輝かしいからであるが、ひとたび生活の基盤が崩れて安定性が失われたり、生活全体に激しい動揺が起こったりするときに思い返されたり、感じられたりする何かであり、あえて言えば安定した生活圏の「ふち、へり、はし」に位置する何かである。我々は宇宙空間が消えてなくなるということを、いま心配する必要はない。我々は、生活するときに、つねに「ふち、へり、はし」を見つめているわけではないという理由によって、妖怪を見なくていいし、また、見ない。見えてくるのは、何か不測の事態が起こったり、突然の変化に見舞われたりするときである。日常性が明るく輝かしいものであればあるほど、見えないものを求めて見

えるようにしたいという衝動は大きくなる。中心は求心力をもち、周辺は見えにくい。中心、あるいは中心部分は明るく合理的で、すべて証明可能なものによって成立している。これに反して周辺は暗くて見えにくい。人為的に光を当てて明るくすることはできるが、つねに暗い部分は後退し、完全に征服することはできない。しかもなお、人はその明るさと暗さの交錯するところに明確な形象を見ようとする。じじつ、それは見えるのである。

遠く離れていて、通常の我々には見えない「ふち、へり、はし」に叫びがあって、この叫びは聞こえるはずなのに、通常の我々には聞こえないとしたら、通常の我々とはいったい何であろうか。見えないもの、忘れ去られたものに対して我々が感応しないなどということがありうるだろうか。我々は感応する。その理由は、明るい日常性と、これを遠くから取り囲んでいる「ふち、へり、はし」の間には、何か特定の主宰的な流れがあって、この流れが日常性を特異なものにしているためである。特定の主宰的な流れは、「ふち、へり、はし」そのものを前面に押し出すことはないし、押し出すことはできないが、粘着力のある何かである。したがって、この主宰的な流れは「ふち、へり、はし」に結晶するものの代替物、あるいは代替物と等価なものを日常性の中に作り出し、日常性をにぎわす娯楽に変えてしまうこともあれば、自らが娯楽を構成することもあるかもしれない。ときとして、一般に芸術と言われるものを生み出すに至る傾向を帯びることもある。遠いはずの「ふち、へり、はし」は、こうして形を変えて身近にあるものとなり、現実の「ふち、へり、はし」は、いわば中和されるということができるだろう。なぜなら、境界の向こうはおおよそ未知であり、未知であるという理由で、闇でもあるからであり、たとえ主体が辺境に気づくとしても、辺境は境界という安定したものを意味しない。<sup>17)</sup> それは、つねに侵犯される危険にあり、侵犯するものの実体も分からない不穏な場所として存在するかもしれないのである。主宰的な流れが向かっている中心と、この「ふち、へり、はし」の間には明らかに相関関係がある。たとえば中心が明るければ辺境は忘れ去られるし、中心に明るさがなくなると辺境に関心が集中していきやすくなるというような関係である。<sup>18)</sup>



先に提起した「シベリア抑留」の話全体は、発端から終わりまで、すべて偶然の事柄として締めくくることが可能である。ここに提起するようになった経緯をこの論の展開を越えて語るができるし、話の発端は偶然だったとして忘れ去ることもできるかもしれないのである。現実の世界を遠近法的に見ることに慣れている目にとっては、いま存在すると考える世界と歴史の中に、あたかも気紛れであるかのように取り上げられる多くの事象がひしめいていると言ってもいい。気紛れに想起されるものが「広島」と「長崎」であるかもしれないし、鬼や憑物であるかもしれない。何かの関係で、それが人間性であったり、憲法であったりするかもしれない。想起されるものが何であれ、ひしめいている概念であるにとどまるかぎり、単なる抽象であるにすぎない。いかに深刻な問題であろうとも、小さな挿話の一つにしてしまうことは可能なのである。そこには因果関係があるであろうし、解説と説明があり、物語があるであろう。ただ総論的に、すなわち、混在する概念の集まりとして見るかぎりでは、想起されるものは、弛緩した空間に浮かぶ幻に似たものにとどまるであろう。死を概念することでさえ同様である。我々は死を怖れることはあっても、生きているかぎりは経験できないものとして当面は彼方に押しやっておくことができる。多くを想起し、多くを知れば量は増える。我々は多くのものを見るし、また見える。しかし、それだけのことである。あとはただ恣意性が残るだけである。

「見る」「見える」という事象に、「どこまで見えるか」という反省が加わると、事態は一変するようになる。「見る」「見える」には、見えるところまで見る、見えるという意味が含まれているのかもしれないが、そのような理解では何も意味しない。この反省は、ここまでは知っているが、ここから先は知らないというように、何か境界あるいは区別する線を自ずから求める。

ここまでは見えて、ここからは見えないというときの線の引き方には二つの方法があるように思われる。一つは、向こうにある何かを知ろうと努力し、一定の理解と判断を与えて区別することであり、もう一つは、向こうにあるものには頓着しないで、もっぱら、こちら側を理解しようとし、こちら側にあるものと、その働きを探ることである。第一の方法は境界線を引くことから始まることになるだろう。第二の方法は、こちら側にある

ことを初めから知っている主体が片隅にあるものをも見据えて、中央との関係で事象を展開させていくことになるだろう。第一の道は線を引くことから始めるので鳥瞰的になる。<sup>19)</sup> 与えられた空間に線を引くので、線の向こう側は既知のものであり、線の向こうにはさらに別の線があり、どこまでいっても明るい。第二の道は境目にも大きな関心が寄せられるか、寄せられた関心の結果が重要な役割を演ずるので、何か異状な事態が起こるか起こったかを前提とするような、未知のものに怯えていなければならない不安定な場を作り出す。地図を見るように境界線を上から見下ろしているのではないのである。

現実世界を分節し、分節したものを総合したところで、元の現実世界になりにくいように、我々は現実を鳥瞰することだけですますことは不可能である。<sup>20)</sup> なぜなら、現実の理解にはあらゆる理解の位相があり、位相は鳥瞰するだけでは見えないからである。平面を線で分断したとしても、線によってできる内側を説明することにはならないのと同じことである。理解するためには、どこかの位置を選んでいるはずであり、その位置というのは抽象的に考えられる一点ではなく、遠近があり、地平線をもつような一点である。おのおの理解の位相にはこのような遠近があり地平線をもつような一点があると考えるとすると、おのおの理解の位相ごとに引かれる線の内側には、安定しているか不安定であるかのいずれかにかかわらず、特定の主宰的な流れがあると考えることは容易である。この主宰的な流れが、引かれる線の内側の特性を決定する。<sup>21)</sup>

## (6)

過去をもつことが当然であるとする環境では、現実はより重層的で複雑になるが、理解するための位置の選択はすでに行なわれており、理解する位置が現在であることを変えることはできない。現在という一点には遠近があり、地平線がある。しかも、ここには主宰的な流れがあり、この流れを知れば知るほど、顕在化しなかったこと、あるいは顕在化しないことも考慮に入れる必要がある。なぜなら、理解する位置というのは、ほとんど確実に行政や統治機構に組み入れられており、意識するしないにかかわらず、影響され規制されているからである。したがって、暗に強制し規制す

るような何かがあるとすれば、その何かをより仮構的なものとして受け止める視点がなければならぬだろう。<sup>23)</sup>

明確な境界線は、明確であることによって我々を規制する。鳥瞰図的に作られたか、あるいは現に存在する線引きは、行政や統治機構の頭脳が利用する効果的な道具であるという理由によって、同じく線の内側の中心に向かう方向性を秘めた主宰的な力の働く場をもっている。線引きの多くは、歴史性と地理性に負っており、つねに恣意的であるとは限らないが<sup>23)</sup>、この線引きとは違っていたり、この線引きとは重なったり、ずれたり、相争ったりするような線引きが存在したり、また、新しくできたりすると、その働きは顕著になる。したがって、ここに引かれる線は独自の概念の特異性を保障するものではないのだから、動いている現実として理解されるときは、未完結という不安定な状態を内にもつ完結した環境として把握されることになるだろう。隣接したり隔絶している概念と合体したり侵食し合う関係が当然のこととして考えられる。

模型概念を構築する理由は、現実の多様性を分析するために一つの方法を導入することにある。我々はすでに見ようとし、また見えてくるものにも多くの概念をもっている。知悉された概念は意味する内容と現実から言っても、しばしば重なったり、同じような意味だったりすることがあるが、複雑化し、奇態化しつつある世界で新しい概念が生まれ、生まれたと知ったときには、我々はすでに、そうした新しく生まれた概念に順応することを強いられることがある。新しい概念に内容を盛り込まなければならないこともある。

既存の概念と新しく生まれるであろう概念をともに包み込む上位概念があるとすれば、それは「文化」である。文化という概念は、人間活動の展開を取り扱うときには、きわめて実効ある概念として働くに違いないが、実行効果をもつように定義するには、あまりにも漠然としていると言えないだろうか。<sup>24)</sup> 一人の人間の感性や個人と他者、異性間の関係、社会機構の中にある多様な様態等、通常は見えにくい機能態を検証できるような方法はないだろうか。検証し、分析するための道具として使えるような特別の概念を構築することはできないだろうか。これが、この試論の出発点である。

目指す概念は新しくなければならない。それは上位概念のように全体を

くくるようなものではなくて、物差しのように機能すべきものである。すでに論じたように、世界をただ上方から見るだけでは、実態を効果的に理解することには必ずしも繋がらない。世界の気象の動き全体を説明されるよりも、いま風がどちらに吹いているかを知るほうが目的に合っていることはいつでもありうる。我々が生きていく営為の中で作り出す創造物が概念という小型の高度な総体から成り立っているとすれば、個々の総体が関係する構図もまた小型の総体に閉じ込められる。そして、これは出発点にすぎない。ここに論じた素描をより緻密なものにするためにはどのような困難があるかを、私は知っているつもりである。

## 注

- 1) 桂田利吉訳『文学評伝』<りふらりあ選書>法政大学出版社、1976年、56頁。
- 2) 「ものを見る」「ものが見える」は「ものに気づく」「ものに気がつく」に置き換えてもいい。
- 3) 「与えられた作用」以前の「与えられ方」そのものを探求する領域があることを、E.フッサールの次の文章が示している。「そして、どんな場合にも重要なのは、なんらかの現象をあたえられたものとして確定するというより、あたえられかたの本質とさまざまな対象の様相の構成のありかたを洞察することである。たしかに、あらゆる思考現象は対象と関係し、あらゆる思考現象が（それこそが第一の本質洞察だが）それを実在的に構成する意識の要素として、実在的な内容をもつとともに、他方、志考の対象を—志考の本質的なありかたのちがいに応じて構成のしかたもちがってくる志考の対象を—もっている」（長谷川宏訳『現象学の理念』作品社、1997年、115頁）
- 4) この点については、ウィリアム・ジェームズが、論考のための豊かな材料を提供してくれる。その中から2つを紹介しておこう。「自然は広大な空間であり、そのなかで私たちの注意は無数の方向に勝手気ままな線を引いている」（榊田啓三郎訳『宗教的経験の諸相』下<岩波文庫>岩波書店、1996年、272頁）「彼ら（回心者）の経験は、最初はまるで混然としているように見えることが非常に多いが、そのうちに、

主張される特殊な方法にいちばんよく似ている部分を選び出され、この部分がいろいろと思索をめぐらされ、ときどき論じられ、そうしてついに、その部分が彼らの目にはっきり見えてき、そして無視される部分のほうは、だんだん目立たなくなってゆく」(ジョナサン・エドワーズからの引用)(同上、303頁)

- 5) ジェイムズ、前掲書、上、114頁。同じく次の言葉を参照してほしい。「この問題〔体外離脱を含む超常現象一般〕は、昔から指摘されたことなんです。不思議にある程度の証拠は沢山出てくるけど、誰も疑問を持つ余地のない絶対的な証拠というのは出てこない。これはウィリアム・ジェームズがいったことなんですけど、どうも、超常現象の証明というのは、本質的にそういう限界を持ってるんじゃないか。なぜそうなのか理由はわからないけど、超常現象を信じたい人には信じるに十分な証拠が出る一方、信じたくない人には否定するに十分な曖昧さが残る。ちょうどそういうレベルの証拠しか出ないのが超常現象であると。これを我々はウィリアム・ジェームズの法則といっています」(コリン・ウィルソンの言葉として引用されている)(立花隆『臨死体験』下、文芸春秋、1996年、190頁)
- 6) ジェイムズ、前掲書、上、116頁。
- 7) ジェイムズ、前掲書、上、247頁。
- 8) 次を参照せよ。立花隆、前掲書、上、385-412頁。
- 9) ハイデガー「存在と時間」(原佑編『ハイデガー』<世界の名著 62>中央公論社、昭和46年、528頁)
- 10) 原佑、前掲書、493頁。
- 11) 次の2書を参照せよ。飯田史彦『生きがいの創造・“生まれ変わりの科学”が人生を変える』PHP研究所、1996年。岡野守也『トランスパーソナル心理学』青土社、1995年。
- 12) 入手した経緯を語れば偶然とは言えないかもしれない。中華人民共和国新疆ウイグル自治区のウイグル民族に接したことから、同系民族ウズベク人の住むウズベキスタン共和国に赴いたのが始まりで、共和国の首都タシケントに滞在中に、私は日本の現代史に関する二つの重要な事実を学んだ。一つは、沿海州に住んでいた13万人ほどの朝鮮民族の人びとが太平洋戦争時に中央アジアに強制移住させられたこと。

もう一つは、戦争終了後、捕虜としてソ連に抑留された日本軍の一部が同じく中央アジアに送られて労働に従事したことであった。その数は最近の新聞の報道（『朝日新聞』・2002年6月12日朝刊）では、2万人以上となっている。私は23,000という数字を聞いている。墓碑に刻まれた数字から推計すると、およそ800人が亡くなり、ウズベキスタンの各地に葬られている。タシケントのヤッカサライ地区にある墓地の一角に日本人墓地が整備されており、ここは日本人観光客の訪れる場所の一つになっているが、墓地の入口近くに小さな私設の抑留日本人資料館があって、抑留者に関する資料を集めるのに協力してほしいという依頼文を私は資料館を訪れたときに受け取っていた。

帰国して1年ほどしたとき、私が滞在中に何度か当地を訪問したことのある私の娘が、新聞の投書欄（『しんぶん赤旗（日曜版）』・2001年6月10日）に「弟の遺品から血涙の流刑記」と題する文章を見つけた。その中のタシケントという文字が目にとまったらしい。

新聞社に連絡して事情を話し、投書の主の連絡先を教えてほしいとお願いした。数日後に新聞社から電話が入り、私の願いを快く了解してくれたという。私は投書の主と話をすることができた。自分でも理由が分からないまま興奮していたが、それからすぐに、もっと興奮することが起こった。抑留日本人、嘉津山武雄氏の綴った『回顧録』が送られてきたからである。私は夢中で読んだ。本は手製で、文章も語るように素朴に綴られていた。帰国してから40年後に綴ったことが昭和63年6月10日付で記されているが、まさしく抑留されて労働に従事したタシケントのことが14頁にわたって書かれていた。私はただちに、この回顧録をタシケントの私設資料館に届ける手配をし、数ヵ月後には金沢市を訪ねて、嘉津山武雄氏の姉の山田つよさんにお会いした。このとき山田さんが下さったのが、ここに引用する同じく手製の冊子『シベリア流刑記』である。

- 13) 今井員雄『シベリア流刑記』昭和57年、107頁。
- 14) 今井員雄、前掲書、12頁。
- 15) 馬場あき子『鬼の研究』三一書房、1972年、119-179頁。
- 16) 妖怪を魔女に置き換えることも可能である。しかし、告白して言えば、妖怪と魔女を同じ遠近法の中に見ることに困難があると知ったこ

とが、この試論を起こす動機となったことも事実である。安易な類推は理解を妨げることがある。それでも、魔女は辺境を概念するとき、きわめて効果的な形象である。次の拙文を参照してほしい。「ブラウンの森—芸術性の過疎化について」(法政評論研究会【Hosei Review】No. 15、1999年、15-25頁)

- 17) 辺境という言葉は、アメリカ史の中ではフロンティアという語に置き換えられ、西漸運動の開拓線を意味していた。しかし、開拓線としての辺境ならば日本にも存在した。地理上の辺境は境界としての国境線の成立よりも前に存在している。次を参照せよ。星亮一『奥羽越列藩同盟』〈中公新書〉中央公論新社、1995年、204頁。
- 18) 関心の移行を意識の構図の中で説明するジェームズの豊かな表現がある。「生活をづづけているうちには、私たちの関心は絶えず変化してゆく、そしてそれにつれて、それが私たちの観念体系のなかで占める位置も、意識の中心から周辺へ、周辺から中心へと、絶えず変化してゆく」(前掲書、上、295頁)「新しい心のエネルギーが人格の中心に向かって運動すること、および古い心のエネルギーが周辺に向かって後退すること(あるいは、ある対象が意識の閾の上に昇ること、および、他の対象が意識の閾の下に沈むこと)は、一つの不可分な現象の二つの叙述方法でしかない、と」(ジェームズの引用文より)(同上、324-325頁)なお、ジェームズが「意識の場」として説明している部分(同上、347-359頁)はこの論考にも深く関連するので、特に示しておきたい。
- 19) 現実世界との乖離を理解するには鳥瞰図、すなわち、さまざまな境界線の引かれている地図を想像すればいいだろう。
- 20) この問題については、エドワード・E・サイードのオリエンタリズム批判を援用して、場所に関する意識が研究方法と研究の内容に関係することを次の拙文で素朴な形で提議したことを記しておきたい。「方法としての中央アジア—英米文学研究と人類学との接点—」(法政英語英米文学研究会【Phoebus】第5号、平成12年、3-14頁)
- 21) 国民国家形成の例としてのアメリカの辺境〔フロンティア〕は、辺境が消えてしまったと判断されたときになって改めて確認された。それとともに、一つの特異な概念でくくられるアメリカが、旧世界から

切り離された。辺境は中心から最も遠く離れているという意義よりも、遠く離れているという理由によって中心に強く働きかけ、中心を変えていき、新しい何かを生み出していく力として作用したことが重要であると考えられている。次の2書を参照せよ。Frederick J. Turner. *The Frontier in American History*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1965. 渡辺真治『フロンティア』<世界史研究双書>近藤出版社、1975年。

中国西域の新疆という呼称は新しい境という意味である。砂漠地帯のケリヤ川沿いに疎らに住むケリヤ人が、「文明と切り離されて生活している」人びとと見なされる理由は、中心から最も遠く離れたところに住んでいるからではなくて、統治機構の線引きの内側では理解されにくいことにあることを積極的に意味している。これは筆者が調査隊に参加して直接に経験したことで、調査活動の全貌は次の書に明らかにされている。法政大学タクラマカン委員会編『沙漠・水・人間——日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査報告書』法政大学、1995年。

- 22) 示唆を受けたのは、古典とも言うべき次の書である。Benedict Anderson. *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*. Rev. Ed. London: Verso, 1991. (白石さや、白石隆訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1999年)
- 23) 次の書を参照せよ。山内昌之『民族と国家』<岩波新書>岩波書店、1998年。
- 24) 文化を定義することがいかに困難であるかを、次の4つの論文が伝えている。梶原景昭「序 課題としての文化」(青木保他編『岩波講座文化人類学第13巻 文化という課題』岩波書店、1998年、1-16頁) 関本照夫「文化概念の用法と効果」(同上、19-39頁) 小泉潤二「文化の解釈——<合意について>——」(同上、175-203頁) 松井健「文化と認識」(同上、205-227頁)



### Summary

The purpose of this paper lies in trying to build a model of an integrated idea, the name of which is still undecided. Geographical ideas of border and frontier are useful for building and explaining the model. We tend to use the word culture as if it were representing a definite entity. What culture as a general idea conveys is not always so definite. It ranges from personal and social cultivation to ethnic and national identity. We will need something like a rule or measure, when we deal with specific and different cultural entities, and relations between them. In this paper, I just try to grope for possibility of building the model.